

人権を大切に明るいまちづくりを

町内外から200人が参加

▼人権啓発講演会および町人権・同和教育研究集会

私たちの身の回りの差別や人権問題とともに考え、一人一人の人権を大切にしたい。明るいまちづくりを進めるため、2007年12月4日、人権啓発講演会及び第32回日野町人権・同和教育研究集会が町文化センターで開かれ、町内外から約200人が参加しました。人権啓発講演会では、鳥取大学医学部教授 藤井輝明さんの講演、研究集会では、各界の関係者らによるシンポジウムが行われました。

開会行事では、主催者を代表して景山享弘町長があいさつしました。続いて、矢田貝勝実行委員長による、「今回の研究集会がめざすもの」について発表が行われました。

▼研究集会がめざすもの（概要）

多元的文化や価値観などの多様化が進み、国際的な相互理解も深まる一方、世界各地では内紛や暴動、悲惨な事件が起こり、多くの尊い人命が失われるという、最も重大な人権問題があります。

また、あらゆる差別の撤廃に向けて、日本が国際社会で積極的な役割を果たすことが重要になってきています。

しかしながら、日本が真に国際社会から信頼を得るには、人権文化社会の創造を目指す。人権意識の高揚など、国民的課題とすべき多くの問題が浮上しています。

そこで、私たちの生活の基

盤である地域社会の観点から考えてみましょう。

明日が希望に満ちて心豊か

でありたいとの願いは、ふるさとに住むみんなの願いです。

しかし、現実はどうでしょうか。産業や文化、教育や情報、医療や福祉基盤などの生活の面では、超高齢・過疎化の問題を背景にして、ほかの地域に比べ格差が広がっていると思います。

人権問題としても、子ども、高齢者、障害がある人などに對する差別、身元調査やインターネットでの中傷などの部落差別や、女性問題など、暮らしの中にも様々な人権問題があることがわかります。

人権意識を高め国際社会で責任を果たすことと共に、特に私たちの生活に直接影響を及ぼす地域づくりの基本として、誰もが安心して暮らせる人権文化社会を目指すことが必要です。

そのために、私たちはまず身の回りの人権について深く見つめようと、「暮らしに生かす人権・同和教育の推進につとめよう！」をテーマとしてここ数年間議論しながら研究してきました。今年度はさらに地域の具体的な人権問題の報告に基づき、それを暮ら

しの中であらわし進めあって行けるような研究へと深めていきたいと考えています。

この研究集会では、藤井輝明先生の講演を踏まえながら、①地域にどのような人権課題があるのか、それぞれの課題がどこでつながっているのかを「正しく知る」こと

②その問題は当事者だけの問題でなく、住民として暮らししていくうえで「自分の問題・みんなの問題」であること③これからの地域づくりには、より一層「人権尊重が基礎」となるべきであること

これらの認識を深め、▼自らの暮らしの中で「態度に表わす」ことの大切さに気づくこと

▼人権を基にした仕組みをみんなで作え、「行動を起こして進める」こと

この研究集会では、以上の項目を推進するための研究の場にしてほしいと思います。

また、今回の課題や成果が、地域での小地域座談会でさらに深く話し合われ、地域づくりにつながればと、今回のシンポジウムの研究主題を「あたたかい日野町、人権の種をまこう、育てよう」とし、研究内容を「深めよう・あらわそう・進めよう」としました。



自らの体験をさわやかな語り口で話す藤井さん

講師の藤井輝明さんは東京都国立市生まれ。現在は、鳥取大学大学院医学系研究科教授として活躍する一方、顔に病氣や傷などを抱える人たちへの偏見をなくすための講演・交流活動など、多方面で活動を行っています。

講演の中で、藤井さんは生い立ちや、病氣のせいで偏見・いじめに苦しんだ体験などを話し、人間一人一人にしかない役割を大切にしたいと訴えました。

全ての人が、さんさんと輝く 栄光の道を歩ける日を目指そう

▼人権啓発講演会 「笑う顔には福来たる」

藤井さんの講演内容（要旨）

差別の中、支えてくれた両親
私は、2歳のとき顔面に海綿状血管腫が現れ、顔の右半分が膨れ上がっています。

この病氣は、遺伝子の異常により皮膚の下の血管の壁が腫れてくるものですが、伝染も遺伝もしません。しかし、周りの人たちからは、「前世の報いがたたりとなって顔に現れたものだ」、「あんな顔の子供が地域にいるのは迷惑。土地家屋の値段も下がるし、まちのイメージが悪くなるのでとっとと出て行ってほしい」など、根拠の無い偏見による言葉を浴びせられました。

子どものころはひどいじめにも遭いましたが、乗り越えてこられたのは両親のおかげ。看護師でもあった母は、私のために地域を一軒一軒訪ね歩いて私の病氣について説明し、ごく普通に接してほし

いと頭を下げてくれました。

地域の人権課題は当事者だけでなく自分の問題だととらえること、それを態度に表して行動していくことが大切です。そのことを母は昔してくれていたんですね。両親は、「世の中に自分の味方は2人いる。世の中の人みんながお前を拒否したとしても、お父さんとお母さんだけはいつでもどこでも永遠におまえの味方だ。辛いことがあったらいつでも両親の顔を思い出せ」と言い続けてくれました。

絶望の中での出会い

成人してからの私にも辛い現実がありました。50社の企業の就職試験を受けましたが、全てだめでした。水泳・スキーなどの資格や教員免許も持っていたのにそれは全く評価されませんでした。容姿のほかに、どの地域で生まれ育ったのかもチェックされていたのだらうと思います。

就職がうまくいかず、『おまえは不要なんだ』と言われ

ているような気分だったとき偶然行った講演会で、血管腫手術の権威と呼ばれていた博士との出会いが私を変えました。博士は「私と一緒に勉強しよう、働こう」と言ってくれ、博士が理事長をつとめる研究所に就職できたのです。

あきらめずに日々を過ごしてその人にしかできない役割や仕事は必ずあるし、その人にしかないチャームポイントはある。世に生まれた以上、不要な人間・役に立たない人間はいません。このことを地域で語っていかうではありませんか。

全ての人生において、早い遅いはあるでしょうが、全ての人がさんさんと光り輝く栄光に包まれた道を歩くときが必ず来ます。そのためには、一人一人が粘り強く、あきらめずに、日々やるべきことをやっていくことが大事です。